

2014年6月19日(木)

聖路加国際大学本館5階506号室 12:40~

発表：クロワッサン編集部 越川典子 記録：M1 江藤亜矢子

出席：中山和弘 M1 佐藤繭子

テーマ：HRT(女性ホルモン補充療法)における情報発信者に求められるリテラシーとは？

23年間、編集の仕事に携わっている。

女性ホルモン補充療法(以下、HRT)の領域を行動経済学の観点で模索していくと面白いと思う。

1992年からHRTを「クロワッサン」という健康雑誌で提案し続けている。全国で20万部を発行しており、読者層は40代の女性が多い。初版のクロワッサン「女性成人病のすべて」はすごい反響があった。

でも、読者からの反応は「そんな治療を待っていた」という喜びの一方で「不自然」「許せない」という二極化したものだった。その後、出版を重ね、その間に女性の「ホルモン」に対する認知はポジティブイメージに変わってきた。イメージを多きく変えたきっかけはNHKのクローズアップ現代の「卵子の老化」が拍車をかけたと思う。しかし、HRTを安心して使用していくにはさまざまな弊害があり日本の普及率は伸び悩んでいる。

中山先生：いきなり更年期時期になって考えるのでは遅い。もっと早くから準備しておくべき。情報ルートをちゃんと作り混乱をなくす。更年期障害は医療化だと思う。社会も個人も医療者もみんな理解できていない。この問題は社会的に考えないとダメ。

越川：男性議員(国会議員の83%)は、女性医療に全く関心がないので、国からの推進は難しい。専門家とメディアのつながりは大切。HRTは選択の医療だが、上手に使用するとメリットが大きいので、女性のヘルスリテラシーが向上し、HRTのリスク認知もちゃんとでき、更年期女性のファーストチョイスとなることを願っている。クロワッサンは私がいる間は、女性ホルモンについては、定期的に情報を発信していきたい。次の号では、長期HRT投与について特集を組んでいけたらと思っている。